

水辺の話題（１）

報告 「埋められた河川の再生に関するシンポジウム」

～川を太陽のもとに取り戻そう～

1. はじめに

戦後の急激な都市化の進展のなかで、わが国では、治水上の観点あるいは水環境の悪化のため、多くの河川が暗渠化されたり埋められてきました。しかし、近年、特に人工的に整備された都市において、河川は「水と緑を有する貴重な自然空間」として見直され、評価されてきています。

このシンポジウムは、フランスにおいてセーヌ川支川のピエーヴル川の再生に先進的に取り組んでいるマルク・アンブローズ ランデュ氏とアニエス・カルリエ氏をお招きし、フランスでの事例を紹介していただくとともに、わが国の有識者も交えて、埋められた河川や水辺の再生のあり方、21世紀のわが国の河川や河川文化のあり方を議論していただいたものです。

表 - 1 コーディネーター及び討論者一覧表

Marc Ambroise-Rendu	「ピエーヴル川を太陽のもとに返す会」代表、ジャーナリスト
Agnes Carlier	「ピエーヴル川を太陽のもとに返す会」アドバイザー
パネルディスカッション【21世紀に向けた河川・水辺の再生】	
森野 美德	日本経済新聞社
石川 幹子	慶應義塾大学教授
尾田 栄章	楽水舎舎主、元建設省河川局長
佐藤 一夫	(財)東京都公園協会理事長、前東京都技監
西村 幸夫	東京大学教授
Marc Ambroise-Rendu	(前出)
Agnes Carlier	(前出)

注) : 講演者、 : コーディネーター、 : パネリスト

2. アンブローズ ランデュ氏の講演概要

- ・ピエーヴル川は、流路延長約32km、流域面積約200km²のセーヌ川の支川である。
- ・川幅は、3～5m、水深は1.5m程度の小川である。
- ・もともと、流域にビーバーが生息していたことから、ピエーヴル川の名前が付いた。現在でも、その上流部は美しい自然が残っている。
- ・ピエーヴル川は、もともと釣り、洗濯場、農地の灌漑用水などに使われていた。
- ・パリは、ピエーヴル川とセーヌ川の合流点に発展した都

市である。

- ・19世紀には、ピエーヴル川周辺にも多くの工場が立地した。工場からの汚水流入による水質悪化のため、パリの市内を流れていた部分が下水道化され蓋掛けされた。
- ・しかし、ヴィクトル・ユゴーなど多くの作家や詩人がその作品中にピエーヴル川を登場させているため、フランスの人々はこの川を決して忘れなかった。
- ・1997年、「ピエーヴル川の再生」という名の協議会を発足させた。現在は、27の市民団体が参加する規模にまで成長している。協議会は、下流の蓋掛けされたピエーヴル川を再生するようイル・ド・フランス地方当局に提案した。当局はこの提案を採択し、プロジェクトがスタートした。
- ・協議会は、水道橋や水車小屋などの歴史的建造物の保存や良好な景観の保全にも取り組んでいる。セーヌ川では年間500万人の観光客が遊覧船を楽しんでおり、このような取り組みは、パリの観光産業にも貢献するだろう。



写真 - 1 当時の蓋掛けされたピエーヴル川

3. カルリエ氏の講演概要

- ・1964年、水に関する法律が施行され、水利用者は水使用に応じて費用負担を行い、その資金は水環境の保全や整備に使われることとなった。

- ・1992年には新しい水法が施行され、「水は国の共有財産であること」が規定された。
- ・ピエーヴル川では、上流域の水質浄化の取り組みが功を奏し、水質は良好になっている。現在は、これらのきれいな水は、蓋掛けされたピエーヴル川に流れ込み、最終的には下水処理場で処理されている。
- ・最初のピエーヴル川再生のプロジェクトは、1998年12月から、蓋掛けされた区間の最上流部の約1kmで行われている。ここでは、3車線の道路を2車線に縮小し、サイクリング道路を移したうえで、従前サイクリング道路だったところに、ピエーヴル川を再生することにした。



写真 - 2 再生前のピエーヴル川（左側道路下）

- ・再生されるピエーヴル川の川幅は4m、深さは1.2mである。通常時には、地表には地下を流れている流量の一部を流し、洪水時は地表から地下に洪水を流す2層河川計画となっている。植生の回復は自然に任せることとした。



写真 - 3 施工中のピエーヴル川

- ・工事費は、植生も含め、1kmあたり700万フランであった。
- ・このような河川の再生にあたっては、生態系の維持、必要

流量の維持、樹木の植栽、水質の浄化などの技術的な課題を解決する必要があった。

- ・このような技術的あるいは経済的な課題のほかに、地権者の合意を得ること、道路当局との道路幅縮小の折衝、等の苦労があった。

5. パネルディスカッションの概要

- ・川の問題は、都市に生活する全ての人々に関わっている。ピエーヴル川の事例は、川を埋めてきたこれまでの流れを180度転換することに大きな意味がある。
- ・東京でも渋谷川・古川、目黒川、玉川上水などの多くの河川・水辺が蓋掛けされた。
- ・川は埋められてしまっても、人を引きつける魅力を有している。蓋掛けされた川でも、川であることを主張し続けている。
- ・渋谷川・古川においても、地域住民のニーズは多様であり合意形成を図るのは必ずしも容易ではなかった。しかし、川だから川らしくしよう、水を活かしていこう、という点については合意された。
- ・多様な住民ニーズに全て対応するのではなく、「川の基本は自然であること」を大事にして行くべきである。
- ・東京の場合、住民の地域や河川への意識、愛着が必ずしも高くない地域もある。
- ・現在、建物は河川に背を向けて建てられている。このような区間は、川だけを考えるのではなく、中期ビジョンを立て、周辺整備と一体的に考える必要がある。
- ・地域住民にとっては、情報が少なく、行政との接点も少ない。また、行政機関の役割は縦割りとなっているので、コーディネートが重要である。
- ・地域住民と行政のコミュニケーション、協力関係が重要である。両者をつなぐ役目として、ジャーナリズムの役割が期待される。
- ・これまで行ってきた「河川の蓋掛け」から、これからは「河川の蓋掛けを行わない」、「蓋掛けされた河川を太陽のもとに戻していく」時代となった。

6. おわりに

「埋められた河川の再生に関するシンポジウム」は、建設省・東京都の後援および当センターの主催により、210名の方々の参加を得て、平成11年9月28日に東京のダイヤモンドホテルで開催されました。